



特集

東京2020オリンピック
バスケットボール女子 銀メダル

林 咲希選手

東京2020パラリンピック
バドミントン男子シングルス 金メダル
バドミントン男子ダブルス 銅メダル

梶原 大暉選手

福岡県知事

服部 誠太郎

特別対談

令和3年7月から9月にかけて、東京2020オリンピック・パラリンピックが開催され、スポーツに対する注目が集まりました。今回は、福岡県民をはじめ日本中に勇気と活力を与えてくださった、バスケットボール日本代表・林咲希選手、バドミントン日本代表・梶原大暉選手をそれぞれお迎えし、服部知事とスポーツに対する熱い想いを語り合いました。

世界初、コロナ禍での開催

知事:この度は、メダル獲得おめでとうございます。初めてのオリンピック、しかもコロナ禍の中で、コンディションの調整やモチベーションの維持が大変だったのではないですか？

林咲希選手(以下、林):コロナ禍では、自分と向き合うことが多かったですね。けがもしていたので、ケアに時間をかけつつ「自分を越えること」を目標に、シュート率を上げることに集中しました。開催されるか分からない状況でしたが、開催を信じて全力で練習に取り組みました。

梶原大暉選手(以下、梶原):体育館での練習ができなかったので、体力が落ちないようにランニングや体幹トレーニングをして

いました。1年の延期が決まった時は、自分はまだ実力不足だと感じていたので「1年間準備する期間が増えた」と前向きに捉えてレベルアップに励みました。

知事:お二人の努力と全力で戦う姿に、本当に感動しました。当日までの心境やメダルを獲得した時のお気持ちを教えてください。

林:実は7月頃、スランプでシュートが全く入らなくなったのですが、私を信じてメンバーに選んでくださったトムヘッドコーチに感謝しています。銀メダルを獲得して表彰台に上がった時、皆さんの笑顔を見て改めて喜びを実感しました。

梶原:僕は大会1カ月前から夢に出てくるほど緊張していましたが、直前になると落ち着いて試合に臨むことができました。金メダルはもちろんうれしかったのですが、ずっと憧れであり、目標でもあるキム・ジョンジュン選手に勝てた喜びの方が大きかったです。

スポーツとの出会い

知事:競技を始められたきっかけは？

林:父と二人の姉がバスケットボールをしていたので、自然の流れですね。気が付いたら始めていました。

梶原:もともと野球をしていたのですが、交通事故に遭ってたくさんの方に支えていただきました。その恩返しをし

林 咲希(はやし さき)選手

糸島市生まれ。小学2年生から地元で競技を始め、現在はENEOSサンフラワーズ(千葉県)に所属。東京2020オリンピックでは全6試合に出場し、得意の3Pシュートを48.6%もの成功率で決め、銀メダル獲得へと導いた。